

●色彩画派としてのフォーヴィスム

中ザワ「近代美術史テキスト」pp.6-7 第2章 野獣主義と立体主義

第2章 野獣主義と立体主義

フォーヴィスム キュビズム

話を至極単純にすると、ほとぼり色彩・情熱のタッチを身上とする後期印象派の画家ゴッホの子孫が「野獣主義(フォーヴィスム)」、意図された形態・必然による構成を身上とする後期印象派の画家セザンヌの子孫が「立体主義(キュビズム)」というようになります。

フォーヴィスムの画家にはマチス、ウラマンク、ドランらがいますが一時の勢いにたよってフォーヴィスムはすぐに崩壊し、それぞれ後には全然違った作風を展開するようになりました。

セザンヌの有名な言葉、「自然を球、円錐、円柱にみたくて絵を描く」もついに本当にやってしまったのがキュビズムのブラック、ピカソ達です。セザンヌは口先ではそんなことを言っている、実際のキャンバスに球や円錐を描いた訳ではありません。そんなことを本当にやった「絵」と呼べるものにはならないと思っています。しかし、キュビズムは本当にやりました。そして

実際、非難ゴッゴでした。「これは、絵ではない」と。

以下は私(筆者)の持論ですが、「近代(モダニズム)のベクトルがはっきりその全貌を現したのはこの時点だったのではないかと思います。「モダニズム」とは、過去を乗り越え、前へ前へと進むベクトルのことと見られますが、印象派以来顕微鏡になってまた「モダニズム」は過去を乗り越え、乗り越えついに「これは絵ではない」と言われてまで「前進しなければならぬ」という明確なヴィジョンを得たのです。ちなみに、モダニズムの同義語は「前衛(アヴァンギャルド)」です。またこの時期以降の「近代」を「現代」ともいいます。③ また、このモダニズムのいう勢は美術に限ったことではなく、社会現象としては資本主義における「拡大再生産」あるいは「経済成長」、自然科学においては「進化論」が「モダニズム」そのもののなです。

ウラマンク「森に狂った風」

ドラン「日没」

ピカソ「アルジェの婦人達」

③ピカソ「アルジェの婦人達」の制作が1907年。これが現代美術の始まりです。なお、音楽界ではストラヴィンスキー「春の祭典」(1913)以降も現代音楽といえます。

マチス「ダンスⅡ」

ブラック「レスダグの家々」

ピカソ「サンザの家族」

ピカソ「テーブルの上のパンと果物入れ」

●色彩論争、色彩VS形態

中ザワ「西洋画人列伝」p.81

第三章 バロックおよびロココ芸術 章論

中ザワ「西洋画人列伝」p.119

第四章 新古典主義、ロマン主義、写実主義 章論

